

私の博物誌

題字 石川進

第二十五回 「正月」

「雪下麦を出だす」を七十二候では末候、つまり、一年の最後の候とする。寒風の吹く中でも、降り積んだ雪の下には麦が芽を出していて、麦秋に向かい成長を開始しているのだ。

私達が旧年を送り、新年を迎えるころ、土の中では既に新しい春への挑戦が始まっている。新暦では大晦日十二月三十一日から一月四日ごろを言う。人間が浮かれながら、「おめでとうございませう」などと挨拶を交わしている間にも、着実に成長を続けるものもあることは、自然の律の確かさが、当節はやりの電波時計にもひけをとらない精密さを私達に教えてくれる。

麦はおろか、米も食べなくなってきた。昨今の社会を思うとき、七十二候の呼び方なども近い将来には、変わらざるを得なくなるのではなからうか。

年末に用意を済ませた各家庭では、屠蘇と称して元日を静かに過ごしながら酒を飲

むのだが、屠蘇とは、年頭に一年の邪気を払い延命を願いながら飲む薬酒のことをいうのだそう、私は実物を知らないが、屠蘇散というものを酒や味淋に浸したもので、年少のものから順に飲むのだといわれている。

酒の好きな父を持ったせい、正月ばかりではなく、日頃の生活でも父の胡座の中に納まり、猪口一盃の酒を四、五歳から飲ませてもらっていた。時として、私には盃が用意されないうきは妙に腹が立ったのを今でも思い出すことがある。密造のドブロクを甘酒と間違え、ガブ飲みして泥酔した記憶もある。

小・中・高と学年や年齢が変わることによる正月の過ごし方にもいろいろ変化が出て来るものだし、それぞれの学校に通う道すがら、目に映るものも日本全体の向上と共に、正月に用いる全てのものが、どんどん変化して行く過去をこの目で見ながら今の歳を迎えたということらしい。

テレビの出現は、日本の国の全てを良くも悪くも変えた。戦後最大の転換期だったと思う。同時進行の形であらゆる情報が流れて、地方による個性はどんどん消され、言葉、礼儀、食物など、あらゆるものが画一化されつつあるのが現代の姿であろう。

しかしその反面、どの地方の人々の日常に関わる必需品も、三十年四十年前とは比較にならない程、情報も物資も行き渡り、

貧富の差が広がったとはいっても、私達の育ち盛りの五、六十年前ごろとは同日の比ではない。

話は変わるが、一昔前のころ「あ・うん」をはじめ、見応えのあるドラマを書かれた向田邦子さんの目線は面白く、昭和十年代前半の話から敗戦後までの、私の知らない正月の美風と気が文章、映像からも立ち上り、それが私には醍醐味で、B・G・Mと絶妙のハイモニーを、日本の茶の間に届けて下さった才能に、深い感謝の念を抱く。

毎年、年末年始になると、町の方々の塩乾物店の店先には沢山の品々が並び、俵や俵に入っている北海道産の水蛭、塩数の子、干鰯、身欠き鰯、するめ、板海苔、昆布、とろろ昆布など、梱包や運搬の方法は変わっても現代に続く海の幸だ。

鮮魚の市場には、信じ難い大きさの鮒、鯛、鰯などが山と並んだ敗戦直後の不思議な現象は、大人になって知ったことだが、漁船が徴用で取られ、漁師が漁をできなかつたせいも大きかったとか。

この七十年に及ぶ敗戦後の正月の残像を紡ぎながら新年を寿ごうと思う。「恭賀新歳」



神社や家庭の玄関には、年神を祀るためのしめ縄が飾られる



書いている人



石川 進

いしかわ・すすむ

一九四二年、いわき市平生生まれ。石川紋店代表。家業のかたわら、幼少から書に親しむ。書の世界で培った点・線・面と墨・紙・水の生理を追求し、石刻による印とのコラボによる抽象、具象の絵画表現を展開。書学書道史学会会員、書法探求顧問

**故人を送る厳粛な儀式。祈る心を真心こめて
やすらぎの杜遠野がお手伝い致します。**




〒972-0161 いわき市遠野町上遠野字赤坂27-1
TEL.0246-89-4777

虎の門病院医師ネットワーク会員
人工透析施設



医療法人 かもめクリニック
理事長 金田 浩

かもめ・みなとみらいクリニック
横浜市西区みなとみらい3-6-3MMパークビル3F TEL.045-228-2212

かもめクリニック
いわき市草木台5-8 TEL.0246-28-1010

かもめ・大津港クリニック
北茨城市大津町北町字深田432-1 TEL.0293-46-0133

かもめ・日立クリニック
日立市東滑川町1丁目3186 TEL.0294-25-1531